

特集

「確かな国語の力を

平成二十四年度版「国語」のご紹介②

育む教科書

新版教科書は、

未来を切り開いていく子どもたちに

「確かな国語の力」を、一生の力として

育むことを目指して編集しました。

今回の特集では、今、求められている

「国語の力」とはどういうものなのか、

また、それを確実に定着させ、主体的な学び手を育てるために、

新版教科書ではどのような工夫をしているのかを紹介します。

国語の力ってなんだろう

対談

ジャーナリスト

池上彰

東京都港区立赤坂中学校教諭

甲斐利恵子

「健全な懐疑心」をもとう

甲斐 今回、新しい教科書に、「メディアと上手に付き合うために」という教材をお

書きいただきました。池上さんは、光村図書のホームページにも、メディア・リテラシーをテーマとした「UFOは実在する」（P7参照）という文章を載せていらっしゃるんですね。

池上 ある大学生のメディアに対する認識に驚いて、メディア・リテラシーの必要性を痛感したエピソードを書いています。

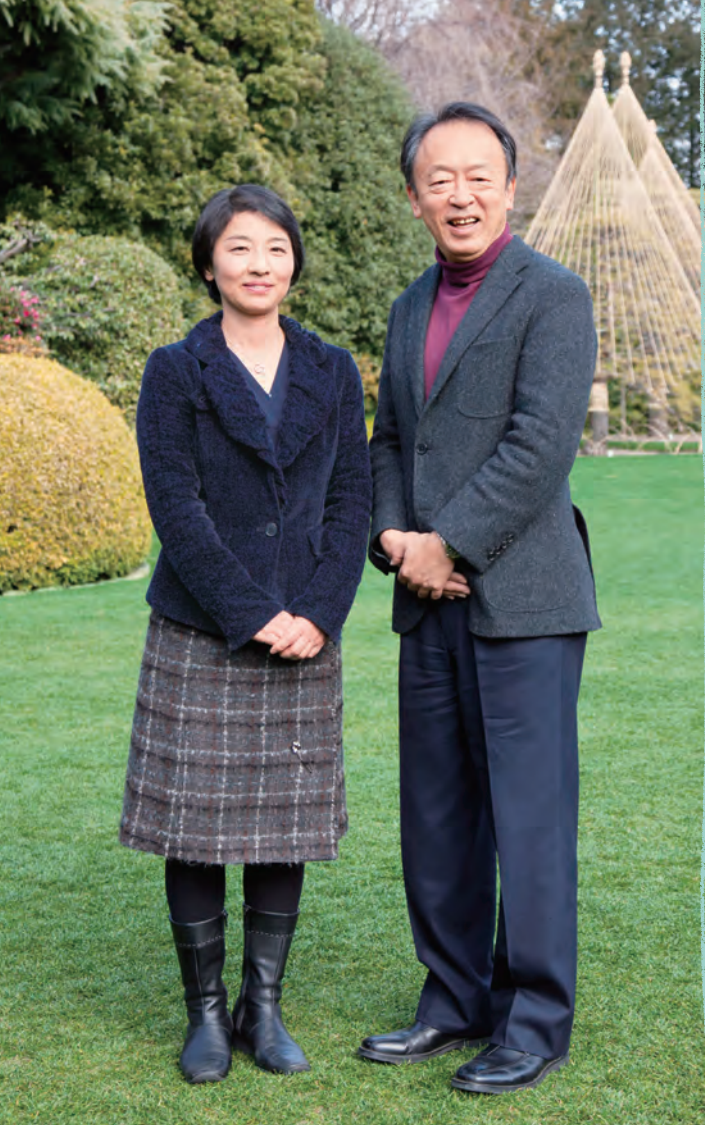
甲斐 実は、先日、その「UFOは実在する」を中学生たちに読ませてみたんです。

池上 どんな反応がありましたか。

甲斐 「納豆がダイエットにいい」という放送があれば売り切れになるというエピソードでは、子どもたちから似たような例がたくさん出てきました。「キャベツはやる気を向上させる」という番組を見たお母さんから、毎日キャベツを食べさせられたという子どももいました（笑）。

池上 それは気の毒に（笑）。

甲斐 驚いたのは、この文章を読んだ後、子どもたちからも、「アメリカがUFOを隠しているのは本当だと思っていた」という声が上がったんです。どうしてそう思ったかと聞くと、やはり「テレビで言ってい



U F O は 実 在 す る 池上 彰

ある大学で、学生たちに国際情勢に関して話をしたときのこと。
質疑応答の時間になり、

「なんでも質問していいよ」

と言うと、女子学生が、

「アメリカはなぜUFOの情報を隠しているんですか？」

と訊ねるではありませんか。思わず絶句しました。

でも、立ち直りが早いのが私の取り柄。

「どうして隠しているなんて断言できるんだい？」

と聞くと、

「だって、テレビで言っていました」

いまの若者たちに、メディア・リテラシーが必要だと痛感するのは、こんなときです。「リテラシー」とは、読み書きする能力のこと。メディア・リテラシーは、メディアを読み解く力です。

「納豆がダイエットにいい」とテレビで放送すれば納豆が品切れに。この放送が捏造だったとわかると、みんなテレビ局を非難しましたが、次に「バナナ・ダイエット」の話題が出ると、今度はバナナが店先から姿を消す。行動様式は変わっていません。

世の中の情報を、そのまま信じないで、自分の頭で考えてみる。この態度を私は「健全な懐疑心」と呼んでいます。本当は「すべてを疑え」と言いたいのですが、そうすると友人を失います。「性格悪い」と言われない程度に、常識に照らして疑ってみる。これが大切なのです。

くだんの女子学生に、私はこう言いました。

「UFOは実在するんだよ。だってUFOとは未確認飛行物体のことだから。それがジェット機か渡り鳥かスーパーマンか、判明するまではUFOと呼ばれるだけさ」

「情報を隠しているという証拠がなければ、隠しているとは言えないんだよ」

と。やれやれ。

光村チャンネル「マンスリーメッセージ」

2009年9月号より

<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/monthly/backnumber/200909/>

ら、見やすくなったり、読みやすくなったりしているんです。

甲斐 伝え手の意図を色濃く反映した編集もあれば、わかりやすく伝えるための編集もあるということですね。

池上 編集するのは人間だから、一生懸命正確にやろうとしても間違いが起きるかも



「だからだ」と言うんです。ちょっとびつくりしてしまいました。

池上 そうですね。子どもに限らず、テレビで言っていたから、正しいことだと受け止めてしまう人が大勢いるということは、やはりとても心配ですね。

甲斐 私の感覚だと、メディア・リテラシーの重要性が言われるようになってから、だいぶ時間がたっているのですが、そういうことはもう十分わかっているんじゃないかと思っていたんです。でも、子どもたちに具体的なことをいろいろ投げかけてみると、メディアのもたらす情報の仕組みについて、本当に知らないんですね。ですから、新しく池上さんに書き下ろしていただいた教材「メディアと上手に付き合うために」で、もう一度しっかりとメディア・リテラシー

を学び直す必要性を感じています。

池上 「UFOは実在する」の中にも、世の中の情報をそのまま信じないで、自分の頭で考えるということの必要性を書きました。メディアと上手に付き合うためには、「健全な懐疑心」をもつことが大切なんです。

情報は編集されている

甲斐 テレビの映像は実にうまくできていますから、ぼんやり見ていると、ついついそうなんだと思ってしまうようなときもありますよね。

池上 確かに、「勘違いした方がいけないんだ」というスタンスで作られている番組もありますからね。映像を丁寧に検討したり、コメントをよく読むと、問題にならないように気をつけていたり、画面の中に小さくお断りが入っていたりします。しかし、普通に見ていると勘違いする。そこを狙っているという部分があるんです。そういうことにだまされちゃいけないと、私はいつも訴えているんです。

甲斐 教材では、「編集」についても解説されています。誤解されるほどの編集はいけません、どのような情報でも必ず編集されているということを、受け手はしっかりと

り知っておくということが大切なんです。

池上 「編集」というと難しく聞こえるかもしれませんが、子どもたちに実際に、クラスのニュース番組を作らせてみるとわかりやすいんです。例えば、ある行事の光景をずっと撮り続けた映像をそのまま流しても、見る方は退屈してしまいますよね。みんなに見てもらおうようにするためには、いちばん面白いシーンを中心にした編集が必要なんです。

甲斐 例えば、出来事の順序を変えるところでしょうか。

池上 そうですね。順番をひっくり返して、最初にいちばん面白いシーンを流して、その後でどうしてそこに至ったかという映像をもってくる。そうした方が、みんなに面白く見てもらえることもありますよね。ニュースも含め、ほとんどのテレビ番組や文章も、そうやって編集されているか

ませんね。

甲斐 子どもたちは面白さということにはとても敏感で、それはとても価値のあることなんです。テレビ番組でも、面白いものだったらそれを夢中になって見る。そして、そこで言っていることは正しいことだと思えてくるのではないのでしょうか。だから、





池上

情報を発信するときには、 「暗黙知のギャップ」に 気づくことが重要です。

先ほどのUFOのエピソードのように、「テレビが言っていたから」という反応になっ
てしまうのではと思っています。

池上 なるほど。テレビの本質も、面白い
ことがいいこと、という一面はありますか
らね。しかし、ニュース番組は、何が起き
たかを正しく伝える必要がある。それは当
然、嘘や誇張があってはいけない。でも、
ただ淡々と伝えていたら見てもええない。
事実を伝えるんだけど、面白くわかりや
すく伝えるやり方というのはあるはずなん
です。それが正しい意味での編集であり脚
色なんです。ただし、それが行き過ぎると
かえって誤解を与えることがあるというこ
とも、われわれ伝え手の側はしっかり肝に
銘じておかねばなりません。

情報を捨てる技術

甲斐 池上さんの「メディアと上手に付き
合うために」を学んだ後に、「気になる『あ
の人』を探ろう」という学習があります。
調べたい人物を決めて、いろいろなメデ
ィアを使って調べ、整理して新聞形式にま
めるといふものです。

この学習で、子どもたちがまずつまずく
と思われるのは、自分がせっかく努力して
集めた情報だから、どれも大事で捨てるこ
とができず、盛りだくさんの内容になっ
てしまうということです。

池上 それは、大人の記者でも同じです
ね。自分で苦労していろいろ取材したこと
は、なかなか切れないですよ。そうすると編
集の責任者であるデスクが怒る。「なんだ
こりゃ。何が伝えたいんだ、短くしろ」と。

でも本人は、みんな大事だと思っているか
らできない。だから、テレビ局や新聞社で
は、デスクという第三者の目でそれを見る
システムになってるんです。

甲斐 なるほど。第三者の目で冷静に
チェックすることですね。授業でい
えば、グループの目ということになりそ
うです。

池上 そうですね。グループで「これは、
要らないんじゃない」などと、お互いに言
い合うことによって、自分では全部大事だ
と思っていたことが、客観的に見るとそう
ではないんだな、ということに気づいてい
けるんですね。

甲斐 そういった話し合いから、「伝える」
ということや、情報の価値についても考え
させることができますね。

池上 ええ。例えば、グループで宇宙飛行
士の若田光一さんのことを調べようとい

ことになる。すると、子ども時代のことを
知りたい人もいれば、宇宙飛行士になるた
めにはどうしたらいいかを知りたい人もい
るし、NASAではどんな訓練を受けるの
かを知りたい人もいる。そういうことをグ
ループで話し合ってみると、みんな興味・
関心が違うことに気づく。最大公約数の形
でまとめていく方法を学ぶ、という効果も
あるでしょうね。

池上流、情報発信術

甲斐 池上さんのニュース番組は、とても
わかりやすいのですが、どんなことに気を
つけて情報を発信していらいっしゃるのです
か。

池上 まず、気になることがあったら、新
聞やネットの記事をきちんと読んでいきま
す。そのとき、常に素朴に、「これ、なん

だろう」「何が起きたんだろう」「どうして
こんなことが起きたんだろう」ということ
や、「自分は、何がわからないんだろうか」
「世の中の人は、何がわからないと思うの
かな」という問題意識をもって読むん
です。すると、「この記事を書いた人は、プ
ロの記者として内容を知っているから、書
いていない部分もあるけれど、一般の人は
初めて知ることだから、そこをいいねいに
解説すればわかりやすくなるな」などとい
うことに気づくわけです。勝手に「これで
わかるだろう」と思い込んでいる「暗黙知
のギャップ」に気づくのが重要なんです。

甲斐 いろんな情報を見たときに、この言
葉ほどの程度受け手がわかっているのか、ど
んな表現がわかりやすいのか、などと、常
に相手の立場になって考えながら解説する
ポイントを絞っていくんですね。

池上 そう。常に素朴な疑問をもって調べ

ること。それから、調べている中で、自分
も初めて知って「へえ」と思ったことを大
事にするということも心がけています。

甲斐 池上さんのお話を聞いていると、そ
の「へえ」がとても面白くて、ひきつけら
れますね。

池上 自分が「へえ」と思ったことをまず
話の最初にもつてくれば、聞き手もだいた
い「へえ」と思って、耳を傾けてくれるん
です。それもわかりやすく伝える秘訣で
しょうか。

甲斐 まず、具体的な例を示して、興味を
ひきつけるということですね。

池上 そういうことです。経済の話をする
ときでも、「物価とはそもそも…」という
理屈から入るのではなく、「物の値段つ
て、よく上がったりがつたりするって
いうけど、どうやって調べてると思う？」と
問えば、聞き手の「えっ？」という疑問を

受け手の立場に立って考えることが

大切なのですね。

甲斐



具体的な質問が、

コミュニケーションを

円滑にします。

甲斐



呼び起こす。そこで非常に具体的な例を出して、「へえ」と思わせるわけです。

甲斐 先ほどの「UFOは実在する」の文章でも、冒頭にびつくりするような大学生の発言を出してひきつけていますよね。

池上 文章だって同じです。一般論から入ると、最初の段階でみなくたびれちゃうんです。ひっくり返して、いきなり具体的な例から入って、その後で「実は、ここで言いたかったことは、こういうことなんだよ」と、一般的な話をもってくるわけですよ。今回の教科書のために書いた教材「メディアと上手に付き合うために」も、そういう構成にしています。

甲斐 子どもたちは、具体例があると喜んで読んだり聞いたりします。そして、その具体例から一般論へというのを何度か往復することによって、すごく学んだ気がするのだと思います。「メディアと上手に付

き合うために」は、内容的な知識の獲得に加えて、学んだという実感がしつかり湧く構成にもなっているの、中学生も納得して読むだろうなと思いました。

池上流、インタビュー術

甲斐 新版教科書の二年生に、「身近な人の『物語』を探る」という教材があります。インタビューをして、その人の歴史を「聞き書き文集」にする教材ですが、子どもたちにとって、インタビューは結構苦手なものなんです。また、私たち教師も、具体的な方法となるとうまく教えられません。ぜひ、インタビューで相手から情報を引き出すときの工夫について、アドバイスをいただきたいのですが。

池上 いろいろありますが、子どもたちの参考になる例を挙げてみましょう。先日、

が教材として取り上げられると、それを教わる時期に、必ず放送局に質問が殺到するんです。ほとんどが「テレビのことを教えてください」(笑)。

甲斐 大変だ。それでは、答えようがありませんね。

池上 もし、学校の先生方が「何を知りたいのかを自分で確認してから聞こうね」と、ひと言言うだけでずいぶん違うはずですよ。「あなたは、テレビの何を知りたいの」と、まず尋ねて、そこで自分で聞きたいことを具体的によく考えさせることが大事なんです。

甲斐 子どもに限らず、大人も同じですね。私もあるセミナーに参加したとき、一枚の自動車の写真を見せられて、そこから例えば、「誰が乗るのか」「乗り心地はどうか」「何のために使うことが多いか」「色や形は気に入っているか」といった、具体的な

NHKの「ハーバード白熱教室」や著書「これから正義の話をしよう」で有名なマイケル・サンデル教授にインタビューしたときのことです。

まず、週刊誌へ掲載するものだから政治哲学の難しい話をしようがない。テレビを見たり著書を読んだりしていくと、教授が引用している豊富で平易な具体例が非常に気になったんですね。「この具体例はどうやって集めたんだろう?」と、まずそこを入り口に決めて、話の組み立てを考えました。

「いろいろな具体例は、どうやって集めるんですか」と聞く。すると、「映画が好きなので、その中から」という話が出るだろう。では、次に「具体的にどんな映画ですか」と聞いていくわけです。「映画の中からです」「ああそうですか」では何も得られない。常に具体的に突っ込んでいく用

問いをたくさん立てていくという練習をしました。それは授業の中での効果的な発問や子どもとのやり取りの上で、ずいぶん参考になりました。

そのように、具体的な質問内容をしつかり考えていくというのは、コミュニケーションを円滑にするという意味でも大事ですよ。

「すごい」「思う」を使わない

池上 具体的に質問しなければいけないんだ、具体的に何か疑問をもたなければいけないだと思っていると、観察力が磨かれるんですよ。普段何げなく暮らしていて、見落としていたことがたくさんある。具体的に、具体的に、と考えていくことによってそれが見えてくる。つまり、観察力がどん



意をしているんです。この取材のときは、うまく映画「ゴッドファーザー」の話になり、「家族愛と犯罪行為のギャップが面白いんだよ」というような話を次々に引き出すことができました。

甲斐 なるほど。具体的な問いかけというのはすごく大事ですよ。子どもたちだとよく「あなたにとって〇〇とはなんですか」というような、相手が非常に答えにくい抽象的な質問になってしまいがちなんです。それから、インタビューを始めると、一問一答式になりがちです。一つ尋ねて返ってきた一つの答えで、次の質問に移ってしまう。これでは何も明らかにならないんですよ。

池上 相手に、「いい質問ですねえ!」と言わせるような問いかけが大事ですよ。(笑)。実は、子どもからの質問で困っていることがあります。教科書でテレビのこと

具体的な疑問をもち続けることで 観察力が磨かれるんです。

池上

「想像力」は

世界を救う力になります。

池上

池上 彰

長野県生まれ。慶應義塾大学卒業後、1973年NHK入局。報道記者として活躍。94年より11年間NHK「週刊こどもニュース」のお父さん役を務める。05年にNHK退職後、フリージャーナリストに。著書に『小学生から「新聞」を読む子は大きく伸びる!』（すばる舎）「わかりやすく伝える>技術」（講談社）など。



甲斐利恵子

福岡県生まれ。東京都港区立赤坂中学校主任教諭。光村図書中学校国語編集委員。専門は国語科単元学習。著書に、『子どもの情景』（共著・光村教育図書）、『聞き手話し手を育てる』（共著・東洋館出版社）、『中学教師もつらいよ』（共著・大月書店）など

どん磨かれていくんです。それが実はとても大事なことだと思います。

甲斐 観察力を磨くということは、それを表現する言葉を磨いているということでもありますよね。

池上 そのとおりです。文章を書くとき、「あの人は美人だ」と表現しても、読み手にははつきりしたイメージが湧かない。具体的に、その女性の髪が黒くて長いとか、まゆ毛がどうか、襟足がどうか、そういう具体的なことを描写することによって、「あ、この人は美人なんだな」と思わせなければなりません。

甲斐 子どもたちは、よく「すごい」という言葉を使います。

池上 よく言いますよね。でも、「すごいって、いったいどういうこと？」と問いを立てることが大事ですよ。すごい、すごい、すごいって、全部それで済ましてしまうと、語彙が貧しくなってしまう。

未来を担う中学生には 判断力と想像力を

甲斐 最後に、これからの時代を担う中学生に必要な力とは何だとお考えですか。

池上 まずいちばん大事なのは、自分の頭で考え判断する力ですよ。言うのは易しいんですが、これはたいへん難しいんです。戦後の日本は、追いつけ追い越せの中で一生懸命やってきました。そして、アメリカやヨーロッパなど世界のトップクラスに追いついたんですよ。でも、追いついたら大人たちは、その先がどうしていいかわからなくなっているんじゃないでしょうか。

甲斐 今までは誰かについていけばよかった。

池上 そう。アメリカの後ろ姿を追いかけてる分には楽だったんです。でも、トップに立った途端、これから進もうとしている

甲斐 作文を書かせたときに、「すごい人だと思いました」とか、「すごいことだと思います」があまりに横行していたので、「すごい」は禁句にすると決めたんです。すると、それだけで文章がいつべんに…。

池上 具体的になりました？

甲斐 いえ、書けなくなりました（笑）。

池上 でも、大事ですよ、ね。「すごい」というのを書いちゃだめよ」ということは。

甲斐 そういう、次の言葉を生み出さない言葉があるということに気づかせたかったんです。

池上 通信添削をやっている先生たちの勉強会で、心に響くような励ましの言葉を書くためには、ぜひ一度「頑張つてね」という言葉をやめてもらいなさい、と言ったことがあります。みんな絶句していました（笑）。

甲斐 例えば「思う」という言葉を使わないと決めたら、「迷った」とか、「飛び上るほどうれしかった」とか、「気がめいった」とか、「思う」に含まれていた感情の幅が鮮やかに浮き上がってくるはずですよ。

池上 そういう常套句や曖昧な表現をあえて使わないようにすることによって、表現に工夫が生まれてくるんですね。

道が、果たして正しい道なのか間違っているのかわからない。

甲斐 間違ってたっていいじゃないかって、思い切るしかないですね。

池上 これからは、まさに試行錯誤です。そのときには自分で考えてみて、やってみて、失敗から学ぶということを繰り返していくしかないんだということですよ。

甲斐 これまでお話をうかがってききましたが、まさに、自分の頭で考え判断する力を養うのが、メディア・リテラシーということが出来ますね。

池上 それから、もう一つ。私の好きな言葉に「想像力は世界を救う」というものがあります。飢えている子どもたちや災害に遭っている人々がいて、それは自分たちが実際に行くことができない場所での出来事であっても、私たち人間は、想像力を働かせることができるから、なんとか手を差し伸べようという行行動を起こすことができる。想像力は世界を救うことができるのです。

想像力とは、「思いやりの力」と言い換えてもいいでしょう。それは取りも直さず、相手のことを良く考えて「わかりやすく伝える」力と密接に重なっていると思います。

自分の頭で考え、判断する力を養うのが、
メディア・リテラシーですね。

甲斐